

# 桐が谷通信

CHUBU GAKUIN UNIVERSITY  
CHUBU GAKUIN COLLEGE

第 5 5 号

2 0 1 6 年 1 2 月 1 日

発行 中部学院大学 宗教委員会  
中部学院大学短期大学部

〒501-3993  
岐阜県関市桐ヶ丘二丁目1番地 TEL (0575) 24-2211

## 「クリスマスとサンタクロースともみの木」

笠井 恵二 (中部学院大学 宗教主事)

今年も、クリスマスの季節になりました。毎年12月25日はイエス・キリストの誕生を祝ってお祝いがなされます。わが国でも、この日ばかりはほとんどの日本人が俄(にわ)かにクリスチャンになって「クリスマスおめでとう！」と祝い合い、シャンパンを飲み、ケーキを食べ、プレゼントを交換して喜び合います。24日はクリスマス・イブで、これは25日のクリスマスの前夜祭の日で、ヨーロッパのカトリック教会などでは前夜のミサが挙げられ、12時が過ぎるとキリストの誕生は明け方だということで、聖歌隊が深夜の寒く冷え込んだ街を蠟燭を手にしてねり歩き、信者の家の前で聖歌を歌います。私も以前、スイスのパーゼルという町に下宿していたのですが、真夜中に聖歌隊の歌声をベッドの中でうとうとしながら聴いたのは、なんとも言えない心地よい経験でした。



そして日本では、クリスマスの日の6日後の大晦日の晩にはみな仏教徒になって、お寺から響いてくる除夜の鐘の音を聴き、明け方には家を出て神社に参詣し、一年の加護をお祈りするのです。このように、年をまたいで8日間のうちに3つの宗教の信者になってお祈りするのが日本人の宗教性というものです。わたしはこのことは決して悪いことだとは思いません。むしろ、この年末から年始めにかけて3つもの宗教の信者になって一年間のけじめをつけるという日本人の豊かな宗教性は、おおらかでいいものではないでしょうか。普段はそれぞれ忙しい生活をしていて宗教のことを忘れて

いるひとびとが、一年の最後と最初に3つの宗教と親しく関わるということは、とてもいいことだと思うのです。年に一回でも、宗教というもの、自分という存在が自分ひとりの力で生きているのではなくて、何か人知を越えた大きな愛の力に守られながら生きてこれたと思う機会をもつということは、素晴らしいことです。この年末の寒い季節にこそ、謙虚さと感謝の思いをもって過ごしていただきたいと思います。

そしてクリスマスには、サンタクロースがトナカイの橇(そり)に乗って、寒い北の空からやってきます。子供たちは、赤い服を着て大きな袋を背負った白い髭のお爺さんが、自分のためのプレゼントをもって空からやって来るのをわくわくしながら待っています。このような謎めいたお爺さんが自分のためにはるばる遠い国からやってくるということを信じて大きくなっていくということは、なにかその子の成長にとって非常に大切な意味があるような気がします。

そしてクリスマスといえば、クリスマス・ツリーです。これはドイツのルターが最初に庭のもみの木を蠟燭でかざったことから始まったといわれています。もみの木が常緑樹であるということは、キリストからあたえられる永遠の命を象徴していますし、温かいキャンドルの灯(ともしび)は、キリストの救いを示しています。クリスマスの夜には、このようなことも静かに考えて過ごして下されば幸いです。

### いつか どこかに きっと

人間福祉学科 北川 博司

いつからだろうね サンタクロースが  
この世にいないことを知ったのは  
誰にも聞かずに 僕等は知ったじゃない  
(チューリップ “Someday Somewhere”)

4年前、チューリップ結成 40 周年コンサート  
にかつてのバンド仲間と行きました。コンサート  
に来ていたのは年齢を重ねた方々ばかりで、時間  
が過ぎるのは本当に早いものだと、改めて思わさ  
れました。

チューリップの歌詞は続きます。

Someday Somewhere Someplace

いつか どこかに きっと

誰かがきみを待っている

実は私もサンタクロースはいるのだと信じてい  
ます。アメリカの新聞社「ザ・サン」の 1897 年  
9 月 21 日付けの社説に、8歳の女の子からの「サ



### クリスマスの祝会

幼児教育学科 杉山 祐子

大学のクリスマスは毎年、礼拝の後に学生主催  
の楽しい祝会が開催されています。はじけるよう  
な学生の笑顔を見ていると、思い出ず光景があり  
ます。

「はやくしなさいーい！」という母の号令の下、  
姉と私は大急ぎ！ 母手作りの新調、しかもお揃  
いの服にそでを通すと、もう嬉しさを抑えること  
ができません。リボンを結んだり靴下を選んだり  
大はしゃぎです。これは私の小学校時代の 12 月  
24 日の風景です。

寒い夕暮れに、3 人手をつないでバスと市内電  
車乗り継ぎ、教会へ行きました。クリスマスイ  
ヴの教会は子どもたちには特別の特別！ 何より、  
夕刻暗くなってから出かけるだけでも大冒険でし  
た。子どもたちのお楽しみは、ミサの後の祝会で  
す。日曜学校のクラスごとに出し物を用意して舞  
台で発表します。子どもにとっては晴れの舞台、  
まるでコンサートホールに立っているような緊張  
感でした。みんなで一生懸命演じた後のたくさん

ンタさんはい  
るのですか？」  
との問いに対  
する答えが載っ  
ています。

「サンタは確  
かにいます。  
サンタを見た  
人がいなくて

も、サンタがいないということにはなりません。  
この世で最も真実なことは、大人にも子どもにも  
見えないのです」。

この社説は目に見えるものしか信じない悲しさ  
と目に見えないものの確かさ、不変さ、そしてそ  
れを信じることの素晴らしさを説いています。

私たちは大人になると、忙しさのなかで、大切  
なことを忘れてしまうのではないのでしょうか。ク  
リスマスが近づくと、ついそんなことを考えてし  
まいます。



近江八幡教会

の拍手は今でも忘れません。私のこれまでの演奏  
活動の原点だと思います。お楽しみ会の最後には、  
憧れの青年部のお姉さんお兄さんから手作りのお  
菓子のカゴをもらいます。家に帰って、そのカゴ  
を机に飾っておきました。

今でもこうしてクリスマスには礼拝と祝会に出  
席できることを幸せに感じています。そのカゴは  
子どもたちに渡されます。夏のキャンプでは子ど  
もたちの世話係、ミサでの神父様のお手伝い、購  
買のお店番をしていることもあり、子どもたちの  
憧れの存在でした。その憧れのお兄さんお姉さん  
からもらうお菓子のカゴは最高のクリスマスプレ  
ゼントでした。

家に帰り着くのは真っ暗な夜です。もらったお  
菓子のカゴを勉強机に置いて寝ます。ケーキを囲  
んだクリスマスはありませんでしたが、子どもは、  
自分の視線でたくさんものを見て感じることで  
あこがれや夢を持っています。大人になると子ど  
もの世界を感じなくなるのでしょうか。でも、何  
かのきっかけでふとよみがえります、例えば、今  
回のレポートを書くために。

チャペルトークから 本学では毎年10月に、愛知県日進市にある「アジア保健研修所 (AHI)」から講師を招いてチャペルを共にし、短期大学部社会福祉学科で特別講義「アジアの保健・福祉を学ぶ」を担当いただいています。今年度は、フィリピンのスルー諸島で地域保健に取り組んでおられるガイダ・フノー・ジャイナルさん(村長、助産師)とエメリン・バージン・ジャラルさん(スルー州バングタラン郡病院院長)のお二人に来ていただきました。お二人は、AHIの研修プログラムから深く学ばれ、住民の中から保健ボランティアを募り、研修をして組織化しました。この保健ボランティアが村人の保健教育や予防活動を推進しています。

チャペルにはイスラム教徒であるお二人も出てくださり、AHI職員の中島隆宏先生がイスラム教徒自治区でのお二人の働きについて紹介してくださいました。以下は中島先生のトークの一部とジャラル先生からの私たちへのメッセージです。(まとめと翻訳:志村 真)

### フィリピンのムスリムと共に

アジア保健研修所 中島 隆宏

AHIはキリスト教基盤のNGOですが、なぜ、フィリピンのイスラム教徒自治区に関わっているのでしょうか。それはフィリピンで最も周縁化されている地域で生きるムスリムがゆえに差別され迫害されてきた歴史があるからです。

また、保健医療行政のグッドガバナンスにより平和づくりにつなげたい。他のNGOどころか、現地の行政機関が入らない地域で離島の離島で敵、味方関係なく人々の健康を進めることが平和を推進することになると思います。

キリスト者としてムスリムとの相互理解と和解の働き、キリ



左から中島先生、ガイダ先生、エメリン先生

スト者だからできる、やらねばならないことだと思います。なぜなら、Allahというイスラム教の神様の名前と思われがちですが、そうではなく、アラビア語で神様をさすことばです。アラビア語を話すクリスチャンの間では神様のことをAllahというのです。私たちは同じ神様を拝んでいるからです。聖書は語ります。「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。」

### 中部学院大学の学生の皆さんへ

バングタラン郡病院院長 エメリン・バージン・ジャラル

私の道のりは厳しく挑戦だらけのものでした。特に家族に関して犠牲を払わなければならないこともあります。けれども、いつも母の言葉を思い出してきました。母は私にこう語ってくれました。「良いことをするのに躊躇してはいけません。たとえ、数多くの挑戦や試練につながるとしても。なぜなら、犠牲には最後に栄光がもたらされるのだから。」

私たちには様々な招きがあることを知っています。誰もがソーシャルワークを追求できるわけではありません。けれども、たとえどのような分野にあっても、どのようなやり方でもよいので、一

人の貧しく健康を害した子ども、あるいはその家庭の苦しみを減らすために力を尽くしましょう。

すぐには成功という果実を見ることはできないかもしれませんが、それでも、貧しい人や困窮している人への奉仕は神への奉仕と同じであることをいつも思い起こしましょう。

貧しい人や困窮する人への奉仕に対する私の動機は常に、アラー(神さま)が造られたものへの奉仕を通してアラーに仕えるという宗教上の招きなのです。私たちすべてが祝福されますように、そして一人ひとりが他者への祝福となりますようにとお祈りいたします。アリガト、ソーマッチ!

2016年度 クリスマス礼拝

「途方に暮れながら待ち望む」

日本キリスト教団 名古屋堀川伝道所牧師

島 しづ子 先生



日 時：12月15日(木) 11:00～12:20

(第2時限の講義は行いません。)

会 場：関キャンパス グレースホール

<奨励要旨>

クリスマスとイエスの幼児期の物語ではイエスの母マリアの姿が印象的です。ルカによる福音書1章26節以下の受胎告知の場面、赤ちゃんを飼い葉おけに寝かせるという貧しさ。誕生の祝いに来た貧しい羊飼いたち。神殿で出会った信仰深い老人たちの不吉な予告と祝福された人生の預言。長じたイエスが神殿で学者たちと議論していたという話。これらの出来事の中で「母はこれらのことをすべて心に納めていた」(ルカ2章51節b)と記されています。イエスの受胎からイエスの人生の最後まで、イエスの人生に起こることに戸惑いながら何かを待ち続けたマリアの姿が浮き上がってきます。

多くの十字架の絵画ではイエスの母マリアが必ず描かれていますけれど、マタイ、マルコ、ルカ福音書はその姿にふれていません。ヨハネによる福音書だけがイエスの母マリアが十字架の下にいたことを書いています。しかもイエスが母と会話し、同じく傍にいた弟子のヨハネと思しき人物に「これからは親子として生きなさい」という言葉をかけています。養子縁組したわけではないでしょうが、息子を失う母と師を失う弟子とが家族として生きていくという姿には象徴的なものを覚えます。

私は娘を16歳で亡くしましたが、その後娘の友人たちと過ごしてきました。血縁を越えて助け合って生きる道をイエスの歩まれた姿から示されてきました。娘や娘の友人たちと生きる中で、何度も生き難さに悩み、戸惑いながら生きてきました。振り返ってみると短命だった娘のいのちも私自身のいのちも祝福に満ちた人生だったと思わされます。それは人生で大事なことは何かを味わい、知ったからです。「途方に暮れても」神様への叫びを胸の中で思いめぐらしながら、あきらめないで生きて来てよかったと思います。

クリスマスの出来事が、みなさんに希望を与えてくれますように！

<講師プロフィール>

島 しづ子 1948年長野県生まれ。農村伝道神学校卒業。日本基督教団鳴海教会牧師などを経て、現在、名古屋堀川伝道所牧師。NPO法人愛実の会理事長、さふらん会理事長。障がい者の地域生活をサポートするため「ラルシュ・ホーム精神」を实践模索中。